

身体拘束のサインをもらえばいいという空気の医療スタッフ

ケアマネジャー・後見人 中野あゆみ

子宮頸がん予防をうたったワクチンの事故にあった方をジャーナリストがどう伝えるか。

重く、難しい話でした。

ジャーナリズムの使命をもって報道に携わってきたことがよくわかりました。高波先生は、事故にあわれ病気になってもなお、困った人のために、何かにつき動かされていく。代弁していく、その強さを教えていただきました。

長谷川先生の身体拘束の話も重く、胸がつかえそうな気持ちになりました。

医療機関は、簡単に身体拘束のサインを求めてきます。家族に・・・

拘束を受けるのは本人です。

私はいつも、本人に聞いてもらえないか何度も交渉します。

（立場がケアマネだったり後見人だったりします）

医療のスタッフには、「身体拘束のサインをただただもらえばいい」というような空気があります。（松沢病院は違うことも知りました）

人権や本人の思いなんて、ちょっと横に置かれている気がします。

治療の名のもとならやってもいい・・・そんな感じで安易に拘束着使われているのは何度も見てきました。

少しでも日本の社会が、そういうことに目を向けて

事故の責任問題もありますが

きちんと向き合う必要があることを感じています。

弱い人の声を拾う・・・

そんなキーワードだったように思います。

地道で、もうからない、でも忸度しないで、おかしいことはおかしいという

週刊金曜日の植村隆社長の熱い言葉が残っています。

ありがとうございました。